

氏名(本籍) <sup>ば</sup> <sup>ば</sup> <sup>み</sup> <sup>か</sup> 馬場美佳(茨城県)  
 学位の種類 博士(文学)  
 学位記番号 博甲第3298号  
 学位授与年月日 平成16年3月25日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
 審査研究科 文芸・言語研究科  
 学位論文題目 尾崎紅葉研究 ―〈紅露の時代〉を中心に―

主査	筑波大学教授		芳賀紀雄
副査	筑波大学教授		犬井善壽
副査	筑波大学教授		新保邦寛
副査	筑波大学教授	博士(文学)	松本肇
副査	筑波大学助教授	博士(人文科学)	清登典子

### 論文の内容の要旨

日本近代文学史上、幸田露伴と並んで〈紅露の時代〉と称された明治20年代の尾崎紅葉の文学については、近代文学の基本的条件とも言える思想性が認められず、また写実も不徹底であるとの理由をもって、その近代性を疑問視するのが一般であった。本論文は、その通念が、〈紅露の時代〉以降支配的になっていく西欧近代リアリズム小説の立場から否定的に断じた結果であるとし、紅葉の作品を、改めて同時代の文学的な状況のなかで的確に測り直すことによって再評価を試み、併せて今日見失われている〈紅露の時代〉の文学概念や創作方法をも明確にしようとするものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章 先行研究批判、及び本論文の目的

第Ⅰ部 第一章 〈改良〉の諷刺画―「風流京人形」論

第二章 〈涙〉の趣向・脚色の変容―「二人比丘尼色懺悔」論

第Ⅱ部 第一章 貞婦の〈心理〉―「夏瘦」論

第二章 〈著者〉のパフォーマンス―「伽羅枕」論(一)

第三章 〈心理学〉的一代記―「伽羅枕」論(二)

第四章 〈裸体画〉小説の自立―「むき玉子」論

第Ⅲ部 第一章 拝金宗の世界―「三人妻」論

第二章 清玄の行方―「心の闇」論

結章 尾崎紅葉にみる“もう一つの近代”

第Ⅰ部では、尾崎紅葉の小説改良の方向性を問題として取りあげ、それは、坪内逍遙『小説神髓』(明治18年)同様、同時代の政治小説の小説改良の功利性を否定し、美的趣味の向上を志すものだったと指摘する。しかも、「風流京人形」(明治21-22年)においては、硯友社としての主張を提唱するといったところに力点を置いていたが、「二人比丘尼色懺悔」に至ると、みずからの改良小説を目指していくことになる。かくて実現された作品とは、同時代に流通していた多様な〈趣向〉を、〈涙〉というテーマに基づいて改良を加え、それ

らを、筋立ての合理性を無視していわばコラーージュ的に構成していくものだったと論ずる。そのうえで、紅葉の創作方法は、明らかに近代小説のそれとは異なりながらも、読者に対して文明国にふさわしい高尚な趣味を要求するという啓蒙性を貫いており、しかもその要求には、近代市民社会を支える〈コンセンサス〉の認識が存したがゆえに、紅葉の小説は、少なくとも近代思想によって書かれたものと成り得ていると指摘する。

第Ⅱ部は『読売新聞』時代の小説を扱っている。近代ジャーナリズムに身を置いた紅葉は、否応無く現実の問題に相渉らざるを得なくなるが、例えば当時の女学生の墮落問題を受け止めて書いた「夏瘦」（明治23年）は、その問題に対して合理的に対処すべく〈心理学〉の援用を試みており、以降、紅葉の小説においては常套化していく。それは、『小説神髓』の受売りというよりは、近代ジャーナリズムというものが、分析的知性に基づく方法によって創作を行う態度を要請した結果だとみるべきであるとする。さらに「伽羅枕」（明治23年）については、江戸伝来の〈粹〉の体現者たる〈紅葉〉なる人物が登場し、一人の遊女の物語を通して〈粹〉を考証してしてみせるというスタイルの小説になっている点に注目する。紅葉の試みは、つまり近代ジャーナリズムの発展によって、作者の情報が商品化して流通する事態が発生し、さらにそうして生成された作者像に立脚して作品が生産されていることを示すものであり、森鷗外や二葉亭四迷などとは異なるものの、そこには、明らかに近代的な作家主体が形成されていると主張する。

かくして紅葉が、文学思想、創作方法、作家主体に亘って、高踏的ではなく、あくまで実作者としての現場から近代小説家たる条件を生成していったと捉え、「三人妻」（明治25年）や「心の闇」（明治26年）のようなすぐれた達成を、その延長線上に位置づけようとするのが第Ⅲ部である。「三人妻」は特異な社会小説と見做され、「心の闇」も自然主義文学に接近した小説のように評されるが、そうした社会小説や自然主義文学との差異は、その近代性の獲得の過程の違いによって生じたものと著者は考える。すなわち紅葉の創作には、西欧近代小説をモデルにして書かれたものとは異なる、いわば「もう一つの近代」文学の生成の過程が刻まれていると見通すのである。

## 審査の結果の要旨

尾崎紅葉の初期小説は、あるいは同時代の趣向のなかでなお差異化すべく腐心し、あるいはプロットを無視した場面中心の構成を行うなど、近代以前の小説形体に縛られている観があり、事実そう評価されてもきた。著者は、そのことについては、紅葉が同時代の読者の現実を無視しなかったためであり、本質的には近代文学を志向していたとの見方を提示している。そして代表的な小説の分析を通じて、近代思想や近代小説の方法を模索し、創作主体を確立する過程が確認されるものの、その本質的な性格は、あくまで読者の現実に根ざしつつみずから作家として鍛え上げていったがゆえに、西欧近代文学をモデルとして高踏的に文学の近代化を推進した森鷗外や二葉亭四迷などとは明確に異なる、「もう一つの近代」の発生と発展というわが国独自の文学近代化の過程のなかで位置づけられるべきものだと、独創的な見解を展開している。

また著者は、こうした紅葉文学の生成の過程を明らかにすべく、同時代の、現在では埋没に帰した多くの小説や多様な資料を博搜し、また当時流通していた〈趣向〉〈脚色〉などの術語を用いて分析する方法を取っている。その結果、紅葉の小説についての、同時代の解釈や位置づけが浮き彫りにされるに至った。さらには、マス・メディアという装置のなかで位置づける試みによって、紅葉の創作行為自体の明確化にも成功している。

叙上の如く、本論文は、内容・方法ともに目覚ましい尾崎紅葉論であるのみならず、日本近代文学の出発期の研究に変更を迫る画期的なものである。ただし、「もう一つの近代」文学を論ずる限り、近代文学とは何かという確たる再定義が必要である。また副題として掲げられている〈紅露の時代〉なる用語にしても同

様である。尾崎紅葉の初期の文学的営為を特権化するための重要な枠組みなのだが、だとすれば、紅葉の文学が担った歴史性が検証された後に、概念枠としての正確な定義がなされねばならないはずである。その場合、一方の幸田露伴の文学の検討が、もとより不可欠であり、なお今後の課題が残されている。

とはいえ、本論文が切り拓いたテーマと方法が、その拡がりや深みを確実に備えたとき、無論そのことこそ本論文の真の目的なのだが、日本近代文学史は、著者によって大きく書き換えられるものと信ずる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。